

特集

セルフディフェンス

人の命は救えても、 自分自身を守れるか!?

いつものように救急搬送があり、患者にとりつき、評価して診断・治療を進めていく。先程までバイタルサインが不安定であった患者は、正しい診療手順で安定化し、退院できるようになってくる。それが、救急医療の現場の醍醐味でしょう。しかしそれは裏を返せば、歩いて病院に向かうこともできず、診断のついた紹介状を持参してくるわけでもない患者に、限られた人的・医療資源で対応せざるを得ない現場の事実を表しています。いや、救急医にとっては、病院はおろか、高速道路や線路上も活動する“現場”になり得ます。

このような救急医療現場で活動する救急医には、時間的にも精神的にもストレスがかかるものですが、それは患者や家族、あるいはともに働く同僚や他職種の方々も同様です。そのストレスがクレームや訴訟、あるいは暴力事件やハラスメントにつながるかもしれません。では、われわれ救急医はどのようにして、さまざまなストレスのかかる現場で安全に救急医療に取り組めばよいのでしょうか。

そこで、今号では「セルフディフェンス」と題し、救急医があらゆる場面、あらゆる観点から“わが身を守る”術を特集することとしました。臨床現場での法的側面を含めた安全確保はもちろんのこと、イレギュラーな患者対応からハラスメントや暴力行為への対処まで、救急医療にかかわるさまざまな“危険地帯”を取り上げて、それぞれに注意しなければならないポイントや具体的な対応法・予防法を、各専門分野の先生方にご教授いただいております。

相手の攻撃に合わせて攻撃する“先”，相手が先んじて攻撃した場合に後から制する“後の先”，そして、相手に攻撃される前に攻めに出る“先の先”。武術の世界では、この“三つの先”を取ることが勝ちにつながるとされています。本特集は、救急医療の現場で“三つの先”を取るための“秘伝の書”となるはずです。「セルフディフェンス」の術で“三つの先”を取り、現場の危険や理不尽に、そして患者の命の危機に打ち勝ちましょう。